

---

# これは自分のための戯曲

火群架々人

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

これは自分のための戯曲

### 【Zコード】

Z5815D

### 【作者名】

火群架々人

### 【あらすじ】

「だから、あなたはキサラギさんである筈なんです。この番号はキサラギさんに間違いないんですから」「この番号は私のケータイの番号です。キサラギさんなんて知りません」間違い電話から始まった。

かれこれ一時間ほど、同じ問答を繰り返していた。

「だから、あなたはキサラギさんである筈なんです。この番号はキサラギさんに間違いないんですから」

「この番号は私のケータイの番号です。キサラギさんなんて知りません」

由梨はもう機械的に答えていた。電話の向こうの男性はやたらと情熱的に、これは「キサラギさん」の番号だと主張しているが、そんなりたく知らない人間の番号だと決め付けられても困つてしまふ。にも関わらずここまで問答が続いているのは、由梨の悪戯染みた好奇心のせいだった。

「あ、わかつた。キサラギさんは居留守を使っている。そしてあなたに後ろから命令しているんだ」

そんな変な状況を身に引き寄せて考えることはできなかつた。ふつと少し吹き出して、由梨は言つた。

「そうだったらおもしろいとは思いますがね。あいにくここには私しかいません。キサラギさんとやらが訪ねてきたつて、防犯上お引取り願いますよ」

「キサラギさんはヤールスマンドではないですよ。ワッセンのまんち絵を訪問販売したりはしません」

これだ。

この微妙な噛み合わなさが由梨の笑いのツボを刺激している。

「あら。私はラッセンの絵は好きですのに。キサラギさんとやらとは趣味が合わないみたいですね」

ふと、由梨は母が行方をくらませた日のことを思い出した。県立美術館に母と連れ立つて行き、モティリアーニの絵を眺めていたら母が居なくなつていた日の思い出。モティリアーニの絵の、あの首の長さと、いつまでも自分が泣いていたことだけはよく記憶してい

る。

「キサラギさんは声帯模写の達人ですからね。あなたがキサラギさんでない証拠はないでしょう」

出た。「悪魔の証明」を持ち出してきた。

由梨は深刻さを装つてこう答えた。

「そうですね。私がキサラギさんとやらであるという証拠でも示してくれればお話は早いんですけどね」

「だから、この番号があなたのケータイに繋がったとこいつことがよりの証拠なんです」

他人事のように感じていた母の蒸発。

由梨は弟と一緒に男手ひとつで育てられ、昨年、編集プロダクションに入社すると同時に一人暮らしを始めた。

「私がキサラギさんとやらだつたとして、それからあなたが何を言い始めるのか個人的にものすごく興味があります」

とつぐに一時間半が過ぎていた。キサラギさんだのそうでないだの、それだけの会話でよく長々と喋ることができるものなあといつ、呆れ半分と感心半分が由梨の心を占めていた。

「あなたがキサラギさんだと認めるのなら、すぐに話したい用件があります」

ここで色々なことがいつぺんに面倒くさくなつて、自分がキサラギさんだと名乗つてみたら。

自制心で悪戯心を抑制しつつ、由梨は言った。

「キサラギさんとやらは」「多忙な方なのです……用件ってビジネスライクなものかしら?」

「個人的な用件でしたら、あなたとお茶を飲みたいというものもあります」

由梨は腰が抜けそうになつた。何をいきなり言い始めるのだ。

「何で私があなたとお茶を飲まないといけないんですか」

母が消えて以来、由梨は無感動を自覚していたが、結局それはただ感動する能力が歪んでいただけだった。それを認めたくなくて、

飛び出すよつに実家を出た。

「キサラギさんの奇行を肴に、あなたとお茶を飲むのも人生に彩りを添えるかと」

「何か、とてもオープンな人ですね。あなたは自分が電話の向こうの男を警戒しているのかといつと、それでもなかつた。気を許したのとは違つ、だが友達意識にも似た奇妙な感覚が由梨の胸中についた。

「では、お茶を」一緒にしてくれるのでですか」「ぜつたいイヤです」

この感覚は多分、母が消え美術館で泣いていたときに、自分を保護してくれたキコレーターのお姉さんが抱いていた感覚に近しいのだと思った。時間を越えて、そうに違いないという確信が胸に灯る。由梨は声に出して少し笑つた。笑いながら言つ。

「絵画を眺める感覚と、絵画と話す感覚。どちらがキサラギさんとやらにふさわしい感覚だと思います?」

「なかなかの難問ですね。頼知も通じなさそうだ」

電話向こうの男は真剣に考へてゐるらしい。数秒間の沈黙の間に、由梨の心の奥底に濁んでいたものが濾過されてゆく。

由梨は黙つていた。こちらから答えを教えてやるものか。適当な言い訳を並べたなら、すぐに通話を切つてやる。

ほんやりとキサラギさんとやらのことを考へる。キサラギさんとこの男がどういう関係なのか考へる。この男とお茶を飲むのもいいかなと考へる。

「絵画を眺める感覚、でしうか」

慎重に男が言つた。

「眺めた感想を、あなたと共有できる訳ですか。のみならずキサラギさんを知る全員と共有できる」

本当は母が消えたなんて嘘で、ここにいる私も嘘つぱちなのかも。明日にでも、食卓に母の手作りのコロッケが並んでいたりして。

由梨は目を閉じて深呼吸をした。一秒かけて息を吸い、一秒かけ

てそれを吐く。

「お茶の予定、いつにならぬへ。キカラギヤセヒヤの畠田こお話  
もいっぱい聞かせて下さーね」

そして相手の反応を待つた。あの田の母親の面影を思い出さうと  
した。父と弟との関わりが、母と同等以上の関わりであったことが  
理解できるのを待つた。

いつの間にか通話は切れていた。

手の中の携帯電話を見つめて、由梨は微笑んだ。その時、世界も  
少しはにかんだような気がした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5815d/>

---

これは自分のための戯曲

2010年10月8日15時18分発行